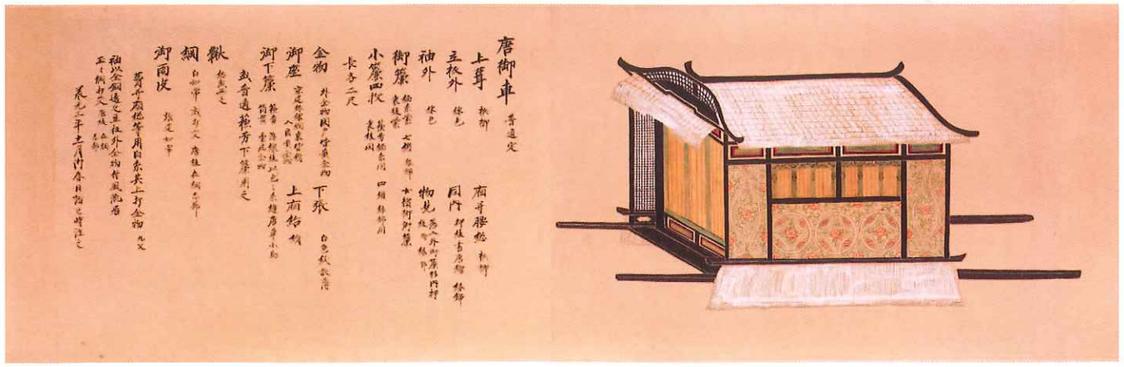
「九条家車図（唐車部分）」（一巻）

Ⅰ期

江戸時代
西園寺家史料



（35.2×898.2cm）

是！ポイント

最高級の牛車である「唐車」は、今では絵画のなかだけの存在になっていますが、66年前までは実物を見ることができました。右下の1枚の小さな絵葉書は、その事実を証明する貴重な逸品なのです。

牛車とは、天皇を除く皇族や貴族が、日常あるいは儀式の際に乗った車で、牛にひかせていました。平安時代から鎌倉時代にかけて多く利用され、『源氏物語』をはじめとする平安文学、あるいは『平治物語絵巻』や『春日権現験記絵』などの絵巻物にも、重要なアイテムとしてたびたび登場します。当館には、『西園寺家車図』と『九条家車図』という、当時使われていた牛車を描いた絵図の写しが各3点あります。

牛車には、それを利用する人の身分に応じていくつかの種類がありました。例えば、今回展示している『九条家車図』に見える「唐車」は、車体が牛車の中では最大で、格も最も高いものです。唐破風の屋根には檳榔が葺かれ、装飾も美しく、利用するのは上皇や皇后、摂政・関白といった身分の高い人々でした。

現在、葵祭や神社の祭礼などで牛車の実物を見ることはできますが、残念ながら唐車は残っていません。ですが、戦前までは、江戸時代末期の安政2年（1855）関白鷹司政通が孝明天皇の新内裏への遷幸に供奉した際に乗用した唐車が、東京帝室博物館（現・東京国立博物館）に陳列されていたのです。昭和20年（1945）に戦災で失われてしまいましたが、その様子は当時の絵葉書からしのぶことができます。

当館には、このほかにも中国で漢代に作られた陶製の牛車型明器（副葬品）や、昭和9年（1934）ベルギー特派大使のタイス氏との宮中午餐会のおりに配られた牛車型ボンボニエールがあります。

遠く中国漢代の牛車型明器、平安時代の牛車を描いた絵図、江戸時代に関白が利用した牛車の絵葉書、そして昭和時代の牛車型ボンボニエールと、場所や時代を超えて存在し引き継がれてきた牛車に、しばし思いを馳せてみられてはいかがでしょうか。

（客員研究員　徳仁親王・木村真美子）

鳳輦及唐車写真絵葉書　明治時代（9.1×14.4cm）

大正9年（1920）山階宮芳麿王が臣籍降下した際に、大正天皇から下賜された文台と硯箱のセット。金銀の蒔絵で豪華に飾られています。

このように文台と硯箱を同じ文様で飾るようになったのはいつころか、確かなところはわかりません。ただ、梅唐草蒔絵文台硯箱（重要文化財　広島・厳島神社）など室町後期の作例もいくつか伝わっているところから、そのころには、すでに文台と硯箱が揃いで使われるようになっていたと考えられます。

よく知られているように、室町時代は、連歌が大流行した時期でもあり、数多くの文房具が造り出されました。そのような流れのなかから、一具をなす文台硯箱という新しい形が生まれ、それが明治、大正のころまで連綿として受け継がれていくのです。

さて、この作品のもう一つの特色は、精緻をきわめた蒔絵の技巧です。

ここでは、文様の部分を盛り上げて画面に立体感をもたらす高蒔絵という技法が主に用いられています。ほかにも平蒔絵、研出蒔絵、切金などの技法が駆使されていて、まさに蒔絵技術の展覧会といった趣をみせています。

ところで、この一具のうち文台の天板裏には「戸嶋光孚謹製」という金蒔銘が書き込まれており、これが大正から昭和初期にかけて、京都の漆芸界で著名な存在であった戸嶋光孚（弥一郎、光阿弥とも）によって制作されたものであることがわかります。

皇室や大名家などに納める作品には、作者銘を入れるのを遠慮するのがふつうです。しかしながら、ここには小さいけれどはっきりと銘が書き込まれています。明治以降、政府は万国博覧会への出品や帝室技芸員制度の新設などを通じて、わが国の伝統工芸がいかに優れているかを世界にアピールしようとしてきました。そのような政府の姿勢は、おそらく作家意識の高揚にもつながっていったでしょう。菊の御紋が入った文台硯箱に刻まれた作者銘は、そのような時代的背景を物語るものと考えられるのです。

（客員研究員　小松大秀）

「松楓蒔絵文台硯箱」（一具）

Ⅰ・Ⅱ期

戸嶋光孚制作
大正9年（1920）
山階家資料

（62.6×36.6×13.5cm）

是！ポイント

微細な金粉を密に蒔き詰め、研ぎ出すことによって、まるで金の板を貼ったかのような外観をみせています。古くからおこなわれた沃懸地という手法に、金粉の精製技術、蒔絵技術の進歩が加わって、この豪華な装飾が実現しました。

（25.8×23.7×5.1cm）